

書評

杉本均編著『トランスナショナル高等教育の国際比較

～留学概念の転換～』（東信堂）

Book Review:

H. Sugimoto ed. “International Comparison of
Transnational Higher Education”

東京工業大学留学生センター／総合理工学研究科環境理工学創造専攻・准教授

佐藤 由利子

SATO Yuriko (Associate Professor, Tokyo Institute of Technology)

キーワード：トランスナショナル教育、留学概念の転換

トランスナショナル教育とは、本書の定義によれば「学生がある外国に実際に滞在することなしに、その国の高等教育を履修し、資格や学位を取得する行為やプログラム」を指し、編著者の杉本氏はこれを「留学しない留学」というパラドックスで表現している。留学は、伝統的に「外国に渡航してその教育機関で学ぶ」と「外国の高等教育機関の学位や資格を得るためのプログラムを履修する」の2つの要素から成立していたのに対し、トランスナショナル教育とは、必ずしも前者の行為を完了せず後者のメリットを提供しようとするもので、安価で手軽であることから、アジア諸国、中東諸国等で広がりを見せている。

OECD—世界銀行は、トランスナショナル教育の移動形態を、①フランチャイズ（A国の大学がB国のプロバイダーに自分たちのコース、プログラム、サービスをB国内もしくは第三国で提供する権限を与える形態）、②トゥイニング（A国の大学とB国のプロバイダーが協力して、学生がA国とB国の双方または一方に滞在し、双方のコースの単位を取得することができるような接続システムを作り上げる形態）、③ダブル／ジョイントディグリー、④単位互換協力、⑤（学位の）認可・認証、⑥e-ラーニング、の6つに分類している。

本書は、トランスナショナル教育の展開状況と課題について整理をした上で、第I編において、イギリス、アメリカ、オーストラリアなどのトランスナショナル教育の提供国側からの分析を、また、第II編において、日本、中国、香港、韓国、東南アジア、南太平洋、インド、中東などのトランスナショナル教育の受容国側からの分析を行っている。

マレーシアのトランスナショナル教育の関係者は、トランスナショナル教育を、学

生、学位授与大学、実際の教育機関の三者が共に WIN-WIN-WIN のマーケットであると語っているそうである。

また、国内の高等教育機会が十分ではない国の学生にとって、この教育形態による恩恵は大きいものがある。他方、杉本氏は、このようなプログラムが商業的利益や手軽さだけを目的にして拡大し続けた場合、「学位の価値」や「高等教育の定義」を損ないかねない危険性もはらんでいると指摘する。このように、正負両方の価値を含有するトランスナショナル教育について、提供国、受容国双方の視点から、世界各地の状況を分析した本書の意義は大きい。

なお本書は、日本比較教育学会・研究委員会による科研費プロジェクト「トランスナショナル・エデュケーションに関する総合的国際研究」(平成 20~22 年度)による研究成果を基にしており、本書の執筆者も 16 人の研究者に上っている。

(A5 版 332 頁、東信堂、3600 円+税、2014 年)